

大連に金州新区が誕生

岡山県大連ビジネスサポートデスク 岡野涼子
鄒 運紅

2010年4月末、大連市は複数の行政区画の変更を発表しました。その内、最も注目を集めたのは金州と大連経済技術開発区との統合が発表された金州新区ではないでしょうか。

金州の歴史

大連はよく知られた街ですが、金州はと聞かれると、知っている人は少ないでしょう。大連自体はもと小さな漁村で“青泥洼橋”として知られていました。日本で有名な旅順は、近代史上最も重要な港である“旅順港”から命名されています。それらに比べると知名度の余り高くない金州ですが、実は中国東北地方の遼東地域に古くからある都の一つです。

金州地域が歴史上初めて登場するのは、前漢武帝元封四年(紀元前107年)に、漢王朝によって築かれた「沓氏県」です。遼代には、南蘇の住民を強制的に現在の金州一帯に移民させて「蘇州」と改め、その後、「化成県」となります。

“金州”の名称が使われ始めるのは貞祐4年(1216年)であり、元代には「金復州万户府」、明代には「金州衛」と称されました。清朝の初め、1734年に「寧海県」が建設され、1843年には昇格して「金州庁」となりました。1913年には「金県」と改められ、中華人民共和国設立後も引き継がれました。1987年4月、国務院が金県を廃止し、「大連市金州区」を設立し、同年5月に正式に標識が掲げられました。金州という名称は、1216年から現在まで約800年にわたり踏襲して用いられているのです。

金州新区

今回の“金州”と“大連経済技術開発区”の統合に当たり、統合後の名称については数多くの候補がありました。例えば、双海新区、金開新区、金馬新区、金港新区などですが、金州の名称の歴史が長かった為、最終的に金州新区と決定されました。

もともと金州区から分割された大連経済技術開発区は、1984年9月25日に国務院に批准された中国第一号の国家級開発区の一つです。大連は中国・北方において最も開放的な色合いの強い都市の一つで、東北地域及び内モンゴルを後背地とした大連・遼寧及び東北経済の発展と、対外開放の牽引役として、当時は新しいタイプの開発区と言われていました。今回の金州と開発区の合併は、大連開発区の発展は、やはり金州と分けて考えることはできないからであり、更に言えば、古くからの都市である金州と、まだ若い開発区の入り組んだ関係から、“金州は開発区の母である”と言う感覚があるからともいえるでしょう。

金州新区は、金州区が管轄する区域のうち二十堡、三十堡、石河、亮甲店の4つの地域を除く12の地域と、開発区管轄の9つの地域からなり、面積は1039.8 km²、総人口は54.6万人です。金州新区は、2つの地域の一体化管理方式が採用され、「大連経済技術開発区委員会(金石灘国家レジャー管理委員会)」と「金州区人民政府」の標識が掛けられることになっています。

金州新区は、金州区石油化工、先端産業、IT、完成車及び部品産業の集中発展、バイオメディカル、LED等の新興産業及び観光業を重点とする現代サービス業の発展に取り組みます。近代的核心理念の建設を速め、13か所の港湾埠頭と8か所の産業集積区の建設に取り組み、設備製造、鋼材、船舶製造、自動車電子産業、ハイテク、新型建材、農副産品加工、ビジネス観光等の複数の産業を大きく発展させます。

大連市金州新区の誕生は、大連市がこれからこの新区に新しい管理体制を敷くこととともに、新しい発展のスタートを意味しています。

